

5年 国語科学習指導案

授業者 柴田 将弥

1. 単元名 「言葉を介して生き方に出会う」

(『勇気の花がひらくとき-やなせたかしとアンパンマンの物語』 梯久美子 学校図書 五年 他やなせたかし作品)

2. 単元の目標

○自分なりの「やなせたかしとはどのような人なのか」を解釈するために、やなせたかしの生涯を紹介する伝記を読むことを通して、人物を解説・紹介する文章の種類と特徴を理解する。

[知識及び技能 (1) カ]

○やなせたかしの『らしさ』という視点から伝記ややなせ作品を読み味わい、自分なりに捉えた「やなせたかしとはどんな人なのか」について自分の考えをまとめる。

[思考力、表現力、判断力等 C (1) オ]

○伝記という種類の文章にふれ「やなせさん『らしさ』とは何か」を考えるために複数の作品を結び付けて読み進める中で、そのおもしろさを味わい、これからの読書生活に生かそうとする。

[学びに向かう力、人間性等]

3. 子どもと教材

本学級の子どもは、自分の解釈を語り合うことにおもしろさを感じている。問いや議題に対して話し合う際には、議論が盛り上がり「次の時間も続けよう」と提案するほど夢中になることもある。積極的に自己を表出しようとしないう子どもも、友達の解釈を聴き内面で自己と比較しながら味わっているのだろう。ノートに文字化して一層表出したり、視覚化された学級全員分の解釈一覧を食い入るように見たりする姿も見られる。また、相手を否定せずに受容しようとする傾向もあり、友達の解釈に対して「そうかもしれない」「確かにそうとも考えられる」と反応を返したりつぶやいたりする。一方で、それぞれの解釈を尊重することで「自分とは違うけれど、そういう考え方の人もいる」と、線引きをしてしまうようにも感じることもある。それぞれの解釈を大切にしながらも相互に解釈を受け取り合い、互いのよさや根拠を取り入れることで、より豊かに読み進められるよさも感じていってほしい。

「この作者はどこの国の人?」「この挿絵はこの作者が描いているのか」本学級の子どもは、物語に出合った時、決まって作者の情報を確認しようとする。4月に扱った物語文『銀色の裏地 (石井睦美)』では、謎の多い【対人物】について考えている際「石井さんは他にも作品を書いているのかな?」「こうやって対人物で何かを私たちに教えるような書き方をするのかな」と、作者の特徴を推察して読み解こうとしていた。6月に行った大研Ⅱ「『生きる』を読む-命がねがい求めるもの-」で扱った『キツネとねがいごと (カトリーン・シェーラー)』でも作者に着目していた。「スイス (作者の出身地) では死神はこんなふうによいものだと考えているのかもしれないよ」「イラストレーターなんだ。きっと絵からも何かを伝えようとする人なんじゃない?」「カトリーンさんが生きる上で大切だと思うものが物語に表れているよね、きっと」など、物語を読み味わう過程で、作者の考え方やその背景などにも思いを馳せていた。5月に扱った説明文「言葉の意味が分かること (今井むつみ)」でも物語同様の子どもが見方が発揮されていた。【筆者の主張】を捉えるという目的をもって読み進めていくと「昨日〇〇 (書店名) で今井さんの本が特集されてた。それも『言葉が…』っていう本だったよ」と、筆者の情報からより適切に主張を読み取ろうとしており、子どもは物語文同様に【読みの視点】をもって文章に向かっていた。一方で、「説明文ってさ、物語とちがってストレート (な書き方) で分かりやすすぎておもしろ味がないんだよね」と発言するなど、「説明文」という「物語文」とは異なる性質をもつ文章への向き合い方に難しさを感じているのかもしれない。

本単元で中心に扱う『勇気の花がひらくとき-やなせたかしとアンパンマンの物語』は、子どもが国語科の学習で初めて出会う「伝記」である。「伝記」はある人物の生き方を説いた説明文の側面と、ノンフ

イクションとしての物語の側面をもっている。また、本教材の中で生涯を取り挙げられているやなせたかしは『アンパンマン』を代表作とし、多くの作品を生み出している詩人・作家である。著名な作品である正義の味方『アンパンマン』をはじめ、『手のひらを太陽に』など、多くの子どもが知っているやなせたかしの作品に抱く「やさしさ」や「明るさ」、「正しさ」、「正義」などの印象とは一見異なり、子どもはやなせさんの生涯の中には辛く、悲しく、苦しい出来事があったことに驚きを感じるだろう。これまで国語科の学びの中で作者に着目する傾向にあった本学級の子どもであれば、その生涯によって培われたやなせたかしの人間性や生き方、考え方や伝えたい思いが作品に込められていると考え、作品を読む必要性を感じるだろう。「伝記」という物語文、説明文の両側面をもつ本教材であること、取り挙げられている人物が著名な「物語」を生み出してきたやなせたかしであることから「伝記」と「物語」を結び付け、その子のものの見方でやなせたかしの「生き方」や「正義についての考え」を解釈していくだろう。そうすることがこれまでもっていた物語の作者に着目するという見方をより強化したり、複数のものを結び付けて読むよさを感じ、豊かな読書生活を生むことへつながっていったりと信じている。

4. 本単元における『その子らしく学ぶ』～本単元で願う「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」～

『手のひらを太陽に』と『アンパンマンのマーチ』に同時に出合った子どもは、「生きる」という言葉が共通して多く使われていること、「生きる」という言葉に対して「よろこび」「かなしさ」などの感情を表す言葉が多く使われていることなどの共通点に気付くだろう。どちらも同じ人物が作詞をしていると知れば、「その人は『生きること』について考えをもっている人なのだろう」「前向きな人なんだろう」のように作詞をした人の人間性に目を向けていく。そうして「作品」から「人」へ関心が推移していく中で伝記『勇気の花がひらくときーやなせたかしとアンパンマンの物語』と出合う。子どもはこれまでの生活経験で出合った『アンパンマン』や、先に出合った2作品の印象から「正義の味方」「みんな仲良く」といった、ポジティブな印象を抱いていると考えられる。伝記を一読した際には「こんな悲しい過去があったのか」「支え合って生きてきた弟を戦争で亡くしたなんてどれだけ悲しかったのだろう」と、作品から抱いていた印象とのギャップを感じるだろう。しかし、2作品と結び付けながらやなせの生き方を知ることによって「戦争での経験があるから『胸の傷が痛んでも』とか『かなしいんだ』っていう言葉も出てくるんだね」や「人生で学んだ『本当の正義』が作品に表れているんだ」と「やなせさん『らしさ』(勇気の大切さや正義についての考え方等)」をその子らしく解釈していく。

単元中盤では、『やさしいライオン』『さよならジャンボ』『すぎのきのぎく』の3つのやなせ作品を紹介する。子どもはこの3作品にもやなせの生涯とひも付く「やなせさん『らしさ』」を見付けようとするだろう。子どもはどの作品からも「大切な存在(命)」や「感謝」「正義」といった単元序盤の2作品と共通する「やなせさん『らしさ』」を感じとることができるはずである。子ども自身が「やなせさん『らしさ』」を見付ける作品を選択することで、その子の見方で捉えやすい『らしさ』を伝記と物語でひも付けていく。ある子は「ブルブルにとって生きる意味はムクムクと過ごすことだったんだ。やなせさんは、生きる意味に向かって勇気をもって行動する大切さを描いたんじゃないかな」「命がけのすぎのきはまさに『自分が傷つくことを覚悟する』だ」と解釈するだろう。またある子は「ジャンボを食べ物にしようとするところがやなせさんの戦争を通して痛感した『苦しさ』と通じているよ。弟を亡くした戦争の怖さみたいなものも感じる」と、やなせの経験と結び付けて解釈するだろう。選んだ作品をもとに解釈した「やなせさん『らしさ』」を伝え合うことで、異なるものの見方にふれ「私はやなせさんが『命の大切さやそれを失う戦争の怖さ』を胸にもっていると思っていたけど、『自分の命の有難さを感じて生きる意味に向かって勇気を出して行動する』っていう思いも確かにあると思った」のように再解釈していくことができる。伝記と作品を往還して読むことで、子どもがやなせの生き方をより深く捉えるとともに、作者の視点が深まることで物語の味わいに変化していくことも実感できることを願っている。

単元終盤には、『チリンのすず』というやなせ作品を扱う。ここまでふれてきたやなせ作品とは明確に異なり、中心人物であるチリンが憎しみを抱き、母の命を奪ったウォーへの復讐に生きる。そうして復讐を果たしたチリンの先には、憎かったはずのウォーへの尊敬の念を抱いていた自分がいることに気付

き羊には戻れなくなってしまう。この物語の結末には「納得できない」と感じる子どももいれば、「ウォーはなぜチリンに感謝したのか」と疑問をもつ子もいるだろう。またある子どもは「この作品にやなせさんはどんな思いを込めたのか」とこれまで解釈してきた「やなせさん『らしさ』」と照らし合わせて解釈しようとするだろう。難解な物語である『チリンのすず』を「やなせさん『らしさ』」とひも付けて読むことで「ウォーはむやみに命を奪おうとしていたのではなく、ただオオカミとして生きていただけなのかもしれない。だからただの悪者には感じられない」や「やなせさんはチリンに、お母さんを亡くした悲しさに負けず生きる意味やよろこびに向かって生きてほしかったんじゃないかな。やなせさんも叔父さんや弟を亡くしても本当の正義を見付けて生きていたもんね」「お母さんが殺されたからって、自分も相手にやり返していいなんて、まさに『ひっくり返ってしまう正義』と同じだ」と解釈を深めることにつながる。そうすることが、伝記を一読して得たやなせの「生き方」や「正義」の捉えを、物語を介することでもう一度自分のものの見方で見つめ直すことにつながっていくと考えた。また、伝記で描かれるやなせと結び付きを見出せず、別の伝記にも手を伸ばそうとする子もいるだろう。伝記というもので挙げられているのは人物の一部分であることに気付き、異なる見方を求めてく姿を期待したい。

伝記という新たなジャンルと出合い、多様な読書生活の在り方を知ることが一人ひとりの子どもの未来の読書生活を豊かにしていくことにつながると信じている。また、伝記を通して、やなせたかしを理解し【作者】の視点をもつことによって、「言葉」は使い手の写し鏡で在り、使い手の思いや感覚から生み出されていることを感じてほしい。それがその子の言語感覚を磨き、よりその子らしく自己を表現したり、周囲を的確に認識したりすることを可能にしていこう。単元を通して、伝記と作品を往還し、やなせたかしの「生涯」や「ものの見方」にふれることが「言葉の力」の涵養のひとつとなることを願っている。

5. 単元構想（全⑦時間扱い／本時は第⑥時）

＜教師の投げかけ＞

子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

①＜『手のひらを太陽に』と『アンパンマンのマーチ』から感じたものは？＞

『手のひらを太陽に』

- ・生きるって何回言うんだろう
- ・「生きているから」の後が「笑う」「うれしい」だけでなく「悲しい」もあるんだ

『アンパンマンのマーチ』

- ・1番しか知らなかった
- ・意外と「むねのきず」とか「てき」みたいな言葉も入っているんだ
- ・生きるって何回も出るね

- ・どうしてこの2つなの？どちらも有名だから知っているけど
- ・どっちも「生きる」が繰り返し出てくるね。『テーマ』が同じとか？
- ・でも『アンパンマンのマーチ』は『アンパンマン』をイメージしてるんじゃないの？『手のひらを太陽に』とつながるのは変じゃない？
- ・でもやっぱりすごく似ているな ・作った人が一緒とかじゃない？

＜どちらも「やなせたかし」さんが作詞した曲です＞

- ・やっぱりそうなんだ ・同じ人が作ると似てくるんだね
- ・作った人の思いとか考えが反映されているのかな
- ・じゃあやっぱり「生きるのって素晴らしい」とか「アンパンマンみたいな正義の人になりたい」っていう人なのかな？
- ・すごく明るい感じの人だよ、きっと ・今も生きている人なのかな

やなせたかしさんはどんな人なのだろう

- ・悲しい出来事もたくさん経験してきているんだね
- ・戦争で考えた「正義」がアンパンマンのもとになっているんだ
- ・だからアンパンマンって食べ物をあげるんだ！やなせさんのメッセージがすごい出てる作品なんだね
- ・この2つ以外にも残した作品はあるのかな？

○子どもが言葉に着目できるよう、歌詞以外の情報を提示せずに2作品に出合うようにする。

○言葉の重なりが視覚化されるよう、子どもの発言で出た言葉に色を分けてマーカーを引いていく。

○作者の考え方が反映していることを捉えられるよう、「似てくるのはなぜか」と理由を問うていく。

○子ども自身が「自分が着目している言葉」が蓄積していけるよう、提示するものと同様の資料を個別に配付する。

○「伝記」は筆者から見たその人であることが分かるよう、取り上げられている人と筆者が別であることを確認する。

②<あなたは伝記を読んでやなせさんはどんな人だと思った？>
 戦争や大切な人の死など苦労人だったんだ。でも、自分のやるべきことを生涯やり抜いたって感じだよね。強い人だと思う。「優しさ」と「強さ」を両方もっていると感じる。「命を応えん」は、強いだけじゃなくて、周りを大切する優しさを感じる

自分の信じる「正義」を貫き通した人って感じ。94歳までやり続けたって、生きがいとか信念みたいなものがあったのかな
 夢を追い続け、出版社に変わると言われても変えずに自分の思いを書き続けていてカッコいい。使命感をもった人だと思う

③④<やなせ作品を味わって、「やなせさん『らしさ』」を感じよう>

『さよならジャンボ』	『やさしいライオン』	『すぎのきとのぎく』
<ul style="list-style-type: none"> ジャンボを食べようとすると、やなせさんの感じた戦争の怖さとか理不尽さみたいなものが描かれているよ やなせさんは戦争と反対に日常こそがしあわせだと考えていたのかな。『手のひらを太陽に』にも通じるね 命がけのバルーの言葉はまさに「自分が傷つく覚悟」だね 	<ul style="list-style-type: none"> 伝記にあったけど、叔父さんへの感謝の気持ちが出ているね。やなせさんは「感謝」とか「心のつながり」を大切にしている人なんだね 夢中になって走っているところは、やなせさんが震災の時に奮い立たせたように本当にやるべきことに勇気を振り絞った感じ。サーカスではないと思ったのかな 	<ul style="list-style-type: none"> すぎのきがのぎくを嵐から守っている姿や、雷に打たれてでも守ろうというところは「自分も傷つくことを覚悟しなければ」と通じるよね 弟と共に寄り添っていきってきたやなせさんだからこそ、すぎのきとのぎくのような関係を心の中で理想に思っているのかもしれないね。お互いに必要な存在なんだ

⑤⑥(本時)<もう一つの作品『チリンのすず』にはどんなやなせさん『らしさ』があるかな>

<ul style="list-style-type: none"> なんだろう。すごくもやもやする これまでのやなせさんの作品とは違って、中心人物のチリンは恨みをもって命を奪って…。まるでやなせさんの大切にしたいことと逆みたいだ ウォーはお母さんの命を奪った悪いやつなはずなのに、最後はなんだか良いやつみたいな感じがするのも不思議。「ありがとう」って…、そんなこと言う？ 	ウォーも命を奪ってしまったけれど、オオカミとして生きるには仕方がないことだったのかも。でも羊であるチリンを悲しませているのはわかっていて覚悟していたのかな	仕返しに生きてチリンにとって、オオカミはすごくむなしな結末だった。やなせさんにとって戦争での経験は、私が考えるよりすごく大きくて、そういう『怖さ』みたいなものをここに表したのかな	ウォーがチリンにとって「先生」になったのは、ウォーの立場で生きてみたら一生懸命生きるウォーにあこがれたからなのか。ウォーは悲しみをもちチリンの命を応援していたのかも	お母さんに対してと同じように、ウォーにも「自分を育ててくれてありがとう」と思ったのかな。自分を大切にしてくれたことに本当の親かどうかは関係ないよ。叔父さんもそうだし、正直、どう読んでも梯さんの書いた伝記のやなせさんとながらないよ。作者の思いは必ずしも反映しないのかな。それとも伝記に書いてある部分以外のやなせさんがあるのかもしれない
---	---	---	--	--

⑦<やなせたかしさんはどんな人なのだろう>

やなせさんの経験した悲しみや苦しみが私が想像するより何倍も大きかったんだと思った。でもその悲しみに負けず、弟さんの言葉をしっかり受け止めて一生懸命生きた芯のある人だと思う	「正義」を色々な目線で考えていた人だったのかなと思った。アンパンマンのようにお腹が空いた人を助けたり、ウォーのように一生懸命な人を支えたり。やなせさんの「正義」があったんだね
人に感謝する気持ちをもち続けて生きたから、「強くてやさしい」人だったんだと思った。「よならジャンボ」のバルーが命をかけてジャンボを助けたのは、強くてやさしい、まさに正義だと思う	漫画家になる、正義を貫く、震災で傷ついた人を励ます…使命をもっていたと思う。一つ一つを一生懸命にやったからこそ、どの作品にもやなせさんの思いや考え方が感じられるんだと思った
やなせさんの生き方を知ること、作品の内容がより深く読めることもあると分かった。やなせさんのことをもっと知るために別の伝記も読んでみたい	

○生き方や考え方、信条などその人を表す言葉が多く挙がるのが推察されるが、子どもが自身の感覚を大切にできるように「らしさ」という言葉を用いるようにする。

○作品と結び付けるごとに解釈が更新されていく感覚を得られるよう、時間ごとにパーツとなるワークシートを用意し、その時間に捉えた「らしさ」をまとめ、最終的に一覧になるようにしていく。

○3作品を読み味わい、自身の見方や捉えていた「らしさ」を生かせるよう、子ども自身が作品を選択する。

○やなせとの結び付きが見出しづらい子どもの支えとして、「正義」「感謝」など、単元の中で多く出てきた言葉をキーワードとして紹介する。

○作品と作者を結び付ける視点をもてるよう、新たな作品にふれる時間の初めには、その時点までの各自が捉えたやなせさん「らしさ」を共有する時間を設定する。

○「伝記と作品」「作品と作品」のように、複数のものを関連付けて読むことができるよう、これまでの自分の解釈の根拠に立ち返る声掛けを行う。

○単元を通した自分の解釈の変容を捉えられるよう、これまでの自分の解釈や扱った作品をじっくりと読み返す時間を十分に設定する。